

東京の特徴的な自然の代表例		長期的に目指す姿		
地形区分 (特徴となる地域や 場所を掲載)	主な特徴の説明	保全・回復	持続的な 利用	理解と 配慮行動
山地	<ul style="list-style-type: none"> ・多摩地域には約53,000haの森林が広がっており、そのうち約6割にあたる30,000haが針葉樹（スギ・ヒノキ等）の人工林 ・奥地には広葉樹が多い天然林が、市街地に近い丘陵地には多様な樹種が見られる里山林がある。 			
秩父多摩甲斐国立公園	<ul style="list-style-type: none"> ・日本では珍しい構造山地（火山が1つも含まれない）で、性質の異なる様々な岩石で形成され、山岳・渓谷の変化に富んだ景観を有する。 ・都内最高峰の雲取山（2017.1m）①やその周辺には亜高山性の森林が広がり、溪流沿いや山麓部は広葉樹林と人工林で占められている。標高に応じた植生の垂直分布が観察できる。 ・多摩川の源流域となっており、多くの森林が水源林として管理されている。 ・山地全般にわたりツキノワグマ、ニホンジカ等の大型哺乳類が見られる。鳥類、魚類、両生類等の種数も豊富。 ・山村集落の文化的景観が見られるほか、歴史ある寺社、郷土芸能、豊かな水を資源とした酒蔵等の産業が見られる。 ・首都圏に近く、交通の便も良いため、多くの利用者が訪れ、ハイキング、登山、キャンプ、釣り、沢登りなど、様々な楽しみ方で、自然に親しんでいる。 ・雲取山周辺一帯（特別保護地区）は2019年6月に「甲武信ユネスコエコパーク」に認定。 			
明治の森高尾国定公園	<ul style="list-style-type: none"> ・高尾山②を中心とするこのエリアは、低山帯でありながら暖温帯と冷温帯の境目にあり、モミ林やカシ類を主体とする常緑樹林、ブナ類を主体とする落葉樹林、スギやヒノキ等の人工林といった林相の相違が見られる。 ・古くから薬王院の社寺林、御料林として森林が守られてきたため、自然林が残されている。 ・イギリス全土で自生する植物の種類の数に匹敵する、1,600を超える種類の植物が確認されるなど、都心（新宿）からわずか50kmの距離でありながら極めて多様な動植物が生息・生育している。 			
水道水源林（多摩川水源域）	<ul style="list-style-type: none"> ・多摩川の安定した河川流量の確保と小河内貯水池（奥多摩湖）③の保全を図るため、東京都水道局が羽村取水堰④より上流の多摩川流域に広がる森林を水道水源林として1901年（明治34年）から管理 ・水道水源林は、人の手によって苗木を植えて育成する「人工林」（約3割）とそれ以外の「天然林」（約7割）で構成 			

地形区分 (特徴となる地域や 場所を掲載)	主な特徴の説明	保全・回復	持続的な 利用	理解と 配慮行動
丘陵地	<ul style="list-style-type: none"> ・多摩地域には約53,000haの森林が広がっており、そのうち約6割にあたる30,000haが針葉樹（スギ・ヒノキ等）の人工林 ・奥地には広葉樹が多い天然林が、市街地に近い丘陵地には多様な樹種が見られる里山林がある。 			
	<p>谷戸</p> <ul style="list-style-type: none"> ・丘陵地が浸食された谷状の地形（谷戸）では、湧水（谷頭タイプ）が多く見られる。 ・低地には水田、緩斜面には畑地、急斜面には雑木林といった里山景観が長らく保たれてきた。 ・市街化などによる田畑の減少や耕作放棄地の増加、雑木林の荒廃などにより生態系の基盤機能は減少しつつある。 ・里山の生態系や、谷戸の湿地環境など、東京の残された貴重な生物の生息・生育基盤として維持・再生されることが望まれる。 ・東京の里山景観・文化の継承という観点からも保護・再生を図るべき重要な自然環境として位置づけられる。 			
	<p>多摩丘陵</p> <ul style="list-style-type: none"> ・多摩丘陵の湧水地周辺や河川周辺では現在でも水田が残されており、都内の貴重な水生湿地環境となっている。 ・谷戸田などの里山風景は東京の文化・歴史的な価値を有しているほか、里山独自の生態系を残す貴重な生息域となっている。 			
	<p>狭山丘陵</p> <ul style="list-style-type: none"> ・古多摩川の侵食により形成された残丘で、荒川水系に属している。 ・丘陵地の南側には空堀川の源流があり、古くから集落が形成されていた。 ・丘陵地の南側には都立狭山自然公園が指定され、北側の埼玉県立狭山自然公園などと合わせ、狭山湖（山口貯水池）⑤、多摩湖（村山貯水池）⑥周辺を含む狭山丘陵を全体的にカバーしているほか、都市公園等により自然環境が保全されている。 ・狭山丘陵は周囲が市街化されており、生物種によっては生態系ネットワークが分断され、孤立化している恐れがある。このため、生態系保全への配慮や他の丘陵地等とのネットワークの強化が望まれる。 ・文化的な特徴として、狭山丘陵の北側や西側において日本三大銘茶のひとつである「狭山茶」が生産されている。お茶の産地としては冷涼な気候であるため葉に厚みがあり、味が良いとされている。 ・狭山丘陵の東側にある八国山緑地は映画「となりのトトロ」のモデルとして親しまれており、多くの市民によって自然保全活動が行われている。 			

地形区分 (特徴となる地域や 場所を掲載)	主な特徴の説明	保全・回復	持続的な 利用	理解と 配慮行動	
台地	<ul style="list-style-type: none"> ・武蔵野台地は関東ローム層(※)が堆積し、水を地下に浸透しやすい(水を得にくい)という地質的な特徴がある。 ※関東ローム層：富士山や箱根山から降り積もった火山灰と砂などで形成された粘土質の土壌が堆積した地層で東京の台地、丘陵地などに広く分布。 ・古くから湧水やそれを源泉とする河川沿いに集落を形成。武蔵野台地では江戸時代に台地上の水利の悪い土地を開発(新田開発)するため玉川上水が作られて以降に広く市街地が形成 ・水はけが良く水田には不向きであるため畑作が中心。河川沿いなどではローム層が堆積しておらず、水はけが悪いことから水田が中心となっていた。 				
(ア) 武蔵野台地西部 ※50m等高線より西側					
	崖線				
	河成(河岸)段丘				
	国分寺崖線	<ul style="list-style-type: none"> ・多摩川の流れてによって沿岸部が侵食されてできた河成(河岸)段丘で関東ローム層が堆積 ・関東ローム層の下には礫層があり、ローム層から浸透した雨水などが崖下の礫層などから湧水として湧出 ・湧水が水源となり、多摩川の支流である野川等を形成 			
	立川(府中)崖線	<ul style="list-style-type: none"> ・多摩川の流れてによって沿岸部が侵食されてできた河成(河岸)段丘で関東ローム層が堆積 ・国分寺崖線より新しい年代に形成された崖線でローム層が堆積 ・70m等高線(下記参照)との交差する場所にママ下湧水がある。湧水を利用した水田が残されており、都内の貴重な水生湿地環境となっている。 			
	海成(海岸)段丘				
70m等高線	<ul style="list-style-type: none"> ・武蔵野台地の標高70mの等高線。50m等高線と同様に湧水地が多い。 ・野川の源流となる湧水や真姿の池湧水群⑦、都内有数の湧出量を誇るママ下湧水⑧などが含まれる。 				

地形区分 (特徴となる地域や 場所を掲載)		主な特徴の説明	保全・回復	持続的な 利用	理解と 配慮行動
	玉川上水	<ul style="list-style-type: none"> 江戸市中へ飲料水を供給するために作られた上水路で、現在の羽村から四谷大木戸まで約43kmに及ぶ。 羽村と四谷大木戸は高低差がわずかに92mしかないため、玉川上水は武蔵野台地の分水嶺（玉川上水以北は荒川方面に、以南は多摩川方面に下る稜線）に沿って敷設されている。 かつて、玉川上水は野火止用水や千川上水などに分岐して武蔵野台地の各地に分水されて飲料水、かんがい用水、水車の動力源などとして利用された。 現在、玉川上水の小平監視所以東には多摩川の水は流れておらず、多摩川上流水再生センターで高度処理された環境用水を放流して水量を確保している。 玉川上水の両岸には名勝「小金井サクラ」に代表される植栽されたサクラや、武蔵野の面影を残す雑木林などの緑地が連なっており、武蔵野台地上の重要な環境軸 都立玉川上水緑道や玉川上水歴史環境保全地域などとして自然環境の保全が図られている。 			
	野火止用水	<ul style="list-style-type: none"> 野火止用水は江戸時代に玉川上水から分水された用水路で、武蔵野台地上の生活用水・かんがい用水として利用された。 現在は、多摩川上流水再生センターで高度処理された環境用水を放流して水量を確保している。 			
(イ) 武蔵野台地東部 ※50m等高線より東側					
崖線	海成（海岸）段丘				
	50m等高線	<ul style="list-style-type: none"> 武蔵野台地の標高50m等高線。南沢湧水群など、湧出量の豊富な湧水があるほか、武蔵野三大湧水池として知られている三宝寺池、善福寺池、井の頭池がある。 50m等高線から南北崖線軸までの武蔵野台地上には開析谷（かいせきこく）と呼ばれる河川由来の谷地が多く形成されている。 			
	南北崖線軸	<ul style="list-style-type: none"> 縄文時代（5000～6000年前頃）に海面が上昇し、関東平野の奥まで海が入り込む縄文海進があった際に、海岸が侵食されてできた海成（海岸）段丘 武蔵野台地の東端であり、崖下に多くの湧水地がある。 			
	玉川上水	(再掲)			

地形区分 (特徴となる地域や 場所を掲載)	主な特徴の説明	保全・回復	持続的な 利用	理解と 配慮行動
神田川・善福寺川・石神井川	<ul style="list-style-type: none"> ・神田川流域は、かつては湧水が豊富で井の頭池、善福寺池、妙正寺池からの湧水を水源としていた。しかし、高度成長期の地下水のくみ上げや、市街化による地表面の舗装などにより現在では、水量がかなり減少しており、平常時では、下水処理水の占める割合が多い状況となっている。水源となっている井の頭池、善福寺池、妙正寺池も、現在では、地下水の揚水によって維持されている。 ・石神井川は、河川沿いに先土器時代以来、縄文、弥生、古墳、奈良、平安の各時代まで遺跡をたどることができ、鎌倉時代以降は農地のかんがい用水として利用されてきた。 ・石神井川中上流部では、可能な範囲で動植物の生息・生育・繁殖環境に配慮した河床の整備や緩傾斜護岸などの親水整備が行われている。 			
渋谷川（古川）・目黒川・呑川	<ul style="list-style-type: none"> ・渋谷川は、江戸時代には四谷大木戸から引れた玉川上水の落とし水と新宿御苑、明治神宮の湧き水等を源水とする流れの豊かな川だったが、現在では平常時の流量が極めて少なく、平成7年度より落合水再生センターで高度処理した下水再生水を送水している。 ・目黒川は淀橋台と目黒台という2つの山の手台地に挟まれた谷底低地を流れている。江戸時代の目黒川流域は、水田耕作の普及とともに農業地帯として開発されてきた。現在では水量が少なく、平成7年度より落合水再生センターで高度処理した下水再生水を送水している。 ・呑川は、世田谷区新町地先を源とし、荏原台と久が原台の間を谷底低地に沿って東南に流れて東京湾に注いでいる。平成7年度より落合水再生センターで高度処理した下水再生水を送水している。 			
等々力溪谷⑨	<ul style="list-style-type: none"> ・23区で唯一の溪谷であり東京都指定の「名勝」 ・樹林が溪谷の斜面に沿って連続しており、武蔵野礫層などの地層からは湧水も見られ、湿性の生きものの重要な生息拠点となっている。 			
皇居吹上御苑⑩	<ul style="list-style-type: none"> ・皇居吹上御苑は、江戸時代に徳川御三家の大名屋敷が建築され、その後は昭和の初めまで日本庭園として維持され、現在、スタジイ、タブノキをはじめとする豊かな森が形成されている。 ・専門家による生物調査の結果、3,053種の昆虫類をはじめ、都心部としては非常に多くの生物の生息・生育を確認している。 ・都内では稀な腐生植物のタシロラン、猛禽類のオオタカ、都内ではほぼ絶滅状態と考えられているベニイトトンボ、アオヤンマなどの希少な動植物の生息・生育も確認している。 			
明治神宮⑪	<ul style="list-style-type: none"> ・明治神宮には234種類の樹木があり、東京ドーム15個分の社は自然林のように大きく豊かに成長しており、市街化が進んだ東京における緑の拠点である。 ・明治神宮の植栽は、創建当初に学者達が、100年後に自然の状態になるよう東京の地質や自然環境を踏まえて杉や檜ではなく主に椎・榎などの照葉樹を植えることを決定した。 ・日本新発見の昆虫（ジングウウスマルヒメバチと命名）をはじめ、数多くの絶滅危惧種や、都会には珍しい生物がいる。 			

地形区分 (特徴となる地域や 場所を掲載)		主な特徴の説明	保全・回復	持続的な 利用	理解と 配慮行動
	国立科学博物館附属自然教育園⑫	<ul style="list-style-type: none"> 江戸時代以降、武家屋敷などとして利用されて、長年にわたり自然に近い状態で環境が保たれてきた。 面積は約20haで、園内には広大な樹林、池のほか、3箇所の湧水がある。 自然教育園ではこれまでに4,000種以上の生きものが確認され、カワセミが繁殖しているほか、297種の絶滅危惧種を確認している。 			
低地・埋立地					
東京低地・臨海部					
	隅田川・荒川	<ul style="list-style-type: none"> 明治43年の水害を契機に荒川放水路が作られ、昭和39年の河川法改正により放水路の方を荒川、岩淵の水門から下流東京湾までの区間を隅田川とした。 隅田川には水再生センターから処理水が合流し、河川水に占める処理水の割合は高い。 水質が浄化されるにつれ生息生物も増え、平成25年度の調査では28種の魚類が生息している。 隅田川の周囲には鳥類の生息に適した荒川河川敷やヨシ原、公園等が存在している。 隅田川の沿川には荒川の高水敷やその他の公園・緑地等の自然が点在し、これらの自然と面的なエコロジカル・ネットワークの形成に貢献している。 			
	江戸川・中川・新中川	<ul style="list-style-type: none"> 荒川と江戸川に囲まれた流域（足立区、葛飾区、江戸川区）は、利根川、荒川の氾濫により形成された低湿な氾濫原で地盤高が低く、かつては水田や湿地が広く分布していた。 江戸時代初期には、ほとんどが海か低湿地であったが、埋立や河川・運河の整備が進み、水運の便がよいことから交易地へと発展。また、足立区及び葛飾区北部は、見沼代用水の整備や葛西用水の整備により農村地帯として発展した。 戦後、多くの小河川・用水路が道路となり、1960年代から宅地化の進行と水田の減少が進み、1990年代には水田、畑がほとんど見られなくなった。 流域における魚類の生息状況は、感潮域となる区間が多いため沿岸部で確認される種も出現しており、淡水域に生息している種と混じり合っている。 植物については、ヨシを中心とした水生・湿性植物が見られる。大場川の中洲には河川敷本来の植生が繁茂しており、葛飾区によって自然保護区域に指定されている。 			
	葛西海浜公園⑬	<ul style="list-style-type: none"> 平成元年6月に開園 葛西海浜公園には、さまざまな渡り鳥が飛来する。冬には、スズガモが海を埋め尽くすように群れをなしているほか、多くのカンムリカイツブリを確認している。 公園の干潟は、平成30年（2018年）10月に国際的に重要な湿地であることが認められ、東京都で初めてラムサール条約湿地に登録。大都市に残された広大な干潟の環境が保全され、人々のさまざまな営みが豊かな自然と共存しているこの公園は、国際的にも貴重な事例である。 			

地形区分 (特徴となる地域や 場所を掲載)		主な特徴の説明	保全・回復	持続的な 利用	理解と 配慮行動
	東京港野鳥公園⑭	<ul style="list-style-type: none"> ・平成元年10月に開園 ・東京港に面した公園内には、海とつながった潮入りの池やヨシ原、淡水池、小川、森林など多様な環境で構成されている。 ・毎年、シギ・チドリ類、カモ類といった水鳥や小鳥類、オオタカなどが公園を訪れ、年間120種類前後、開園以来227種類の野鳥を確認している。 ・野鳥のほか、水辺の生物、カニをはじめとする干潟の生物、草地や林にすむ虫など、多くの生き物の生存基盤となっている。 			
	海の森公園⑮	<ul style="list-style-type: none"> ・中央防波堤内側埋立地は昭和48年から昭和62年にかけて1230万トンのごみによって造成し、リサイクル土や建設発生土などで表面に層を形成している。 ・面積は、約149ヘクタール（うち、陸域約95ヘクタール、水域約54ヘクタール）、スダジイ、タブノキ等の苗木24万本をこれまでに植樹している。 			
	多摩川低地				
	多摩川	<ul style="list-style-type: none"> ・多摩川は、秋川、浅川、野川などが合流して東京湾に流れる一級河川 ・多摩川水系は東京都の水源の約2割である。 ・羽村取水堰より下流では支流や流域水再生センターからの処理水が合流する。多摩川の中流域では水量のおよそ半分を処理水が占めており、水再生センターでの高度処理が進むことが多摩川の水質改善に大きく寄与している。 ・現在では多くのアユが遡上するなど豊かな生態系が回復しつつあるが外来種も増加している。 ・河川敷には草地や礫地、葦原などの東京では貴重な自然環境が残されており、河川敷の一部は生態系保全のためのエリアや都民が自然と触れ合うためのエリアとなっている。 			
島しょ					
	伊豆諸島	<ul style="list-style-type: none"> ・富士火山帯に属する火山島 ・地質（溶岩の組成）と、波・風等の影響により、各島は相互に関連を持ちながらそれぞれ異った地形的特色を呈している。 ・植生について、固有あるいは準固有の種や変種が多く存在するほか、噴火による裸地形成から極相に至る植生の遷移の諸段階を見ることができる。 ・動物相としては、哺乳類、両生類、爬虫類の種類数は少ないが、鳥類は270種を数え、陸鳥類では、固有種や固有亜種が多く存在する ・海水浴やダイビング、サーフィン、イルカウォッチングなどのマリレジャーが中心で、利用者は夏期に集中。通年利用としては、自然探勝、ハイキング、休養、魚釣等。 ・大島は2010年9月に日本ジオパークに認定された。 			

地形区分 (特徴となる地域や 場所を掲載)	主な特徴の説明	保全・回復	持続的な 利用	理解と 配慮行動
小笠原諸島	<ul style="list-style-type: none"> ・太平洋プレートの沈み込みによって、海洋地殻の上に誕生した海洋性島弧 ・海底火山活動による枕状溶岩の露頭、海食崖や南島の沈水カルスト地形など特色のある景観が見られる ・植生について、大陸と陸続きになったことのない亜熱帯性の海洋島であるため、固有種が多く、独自の生態系を構成 ・オガサワラオオコウモリ、オガサワラノスリ、メグロ等の固有種や固有亜種が数多く生息。陸産貝類では90%以上が固有種。 ・ザトウクジラやマッコウクジラ等の海洋哺乳類が生息し、サンゴ礁等の多彩な海中景観が見られる。アオウミガメは日本最大、世界でも有数の繁殖地となっている。 ・自然探勝やトレッキング、ダイビングやシュノーケリング、ホエールウォッチング、ドルフィンウォッチング、シーカヤック等 ・平成23年に世界自然遺産に登録。ノヤギ、アカギ、グリーンアノール等の外来種に起因する自然環境保全上の課題があり、これらへの対策を進めている。 			
その他（東京都全域又は複数域に共通するものなど）				
都市公園 (都立公園)	<ul style="list-style-type: none"> ・都内のまとまった自然地や貴重な湧水地、庭園など多くの緑地・湿地などが都市公園に指定され残されている。 ・都市公園は東京に残された貴重な生きものの生存基盤、エコロジカルネットワークの拠点としての役割が期待されているほか、都民が自然に触れ、親しむための拠点として重要な役割を果たしている。 <p>【市街地の主な都立公園】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・湧水地保全…石神井公園（練馬区）⑩、善福寺公園（杉並区）⑪、井の頭恩賜公園（三鷹市、武蔵野市）⑬ ・崖線保全（国分寺崖線）…武蔵国分寺公園（国分寺市）⑭、武蔵野公園（小金井市、府中市）⑯、野川公園（三鷹市、調布市、小金井市）⑰、神代植物公園（調布市）⑱ ・水生生態系保全…水元公園（葛飾区）⑲、神代植物公園水生植物園（調布市）⑳ 			

地形区分 (特徴となる地域や 場所を掲載)	主な特徴の説明	保全・回復	持続的な 利用	理解と 配慮行動
民間敷地内緑地	<ul style="list-style-type: none"> ・かつての屋敷林や庭園、寺社林などが現在の企業緑地や学校内緑地、ホテルの庭園などとして市街地の貴重な緑地として現存している。 ・開発や災害等を免れて現在まで残されているこれらの緑地は、東京本来の生態系を知るための重要な生態系拠点であるとともに、開発等により失われた東京の生態系を回復していくための中核となる重要な緑地である。 			
	<ul style="list-style-type: none"> ・比較的規模が小さい緑地である場合がほとんどであり、開発や環境の変化などが原因で容易に消失するため、緑地の維持・保全に対する支援や、周辺の緑地等をつなぐエコロジカルネットワークを形成するなど、リスクの軽減を図ることが重要 ・民間企業の中には所有地等を活用してエコロジカルネットワークの形成に貢献する取組が広がりつつある。 ・今後、現在はごく限られた緑地等に残されている生態系や生存基盤が徐々に回復し、他のより大きな生態系拠点と接続してエコロジカルネットワークを形成することが望まれる。 ・企業緑地等の多くは人々が集い、憩う場となっており、人々が自然に触れ、親しむ接点としても重要な役割を果たしている。 			
	<ul style="list-style-type: none"> ・屋敷を取り囲むように形成された樹林地を屋敷林という。 ・樹林としての規模は小さいものの、地域らしさを感じる身近な緑として貴重になっている。 ・企業緑地等とは異なり個人所有であるため、維持管理の負担や相続等の問題から消失するリスクが高い。 			
	<ul style="list-style-type: none"> ・寺や神社の敷地には御神木など古くから信仰対象であり開発されにくい樹林があり、これを寺社林という。規模の大きなものもあり、地域の特色や歴史を感じられる身近な緑となっている。 			
	<ul style="list-style-type: none"> ・農地や雑木林は、市街地内に残された貴重な緑地として、東京のエコロジカルネットワークの中継地となっている。 ・農地や雑木林（屋敷林や薪炭林など）は河川沿いの低地と並び、草地性の生態系を支える重要な役割を担っている。 ・資源利用されなくなった雑木林の中には、樹木が成長や手入れの不足などにより、草地性の生態系に適した明るい環境から森林性の環境に遷移しているものがある。 ・土地の多くが民有地であるため、相続などの際に失われる傾向は続いており、農地や雑木林の規模の縮小の懸念が高まっている。 ・生きものの生存基盤としての機能を保持するためには一定規模のまとまった農地・雑木林の確保と適正な維持・管理が行われることが望まれる。 			